



2013 FIM ENDURANCE WORLD CHAMPIONSHIP -24HOURS OF LE MANS



ルマン24h耐久ロードレース参戦報告書

- ゼッケン/エントリー名 : #5 / SynergyForceTRICKSTAR
- 監督 : 鶴田 竜二
- ライダー : 芹沢太麻樹・出口修・井筒仁康・寺本幸司
- 開催日/サーキット : 9月21日(土)~9月22日(日)/
- マシン : カワサキZX10R
- 結果 : 予選17位 決勝9位

【17日(火) フリー走行~18日(水)車検】

公式日程 前日、午前中に3時間、午後から2時間 のフリー走行。

8月の事前テストに参加出来なかった井筒選手、急遽リザーブライダーとして起用された寺本選手はコース、マシンに慣れる大事な走行だった。芹沢選手、出口選手は、タイムアップをはかるべく臨んでいた。

午後の走行は雨となり、後半に出口選手が転倒をしてしまった。

ライダーにケガは無く安心する。

この転倒で、マシン修復には時間がかかることになってしまう。明日の車検に間に合わせるため必死の整備が続いた。

翌日18日の車検では、修復させたマシンを車検場に移動させる。

ここでも、日本のレースとは違う レギュレーションや、言葉の壁もあり、スムーズとはいえないものの無事 車検まで終えることができた。

19日(木)予選

予選前の2時間のフリー走行では、芹沢選手・出口選手・井筒選手・寺本選手の4人が走行し、マシンのセッティングやコース特性を吸収するべく走行を重ねた。

チームのベストタイムは1分41秒934というタイムにて走行を終えた。

【19日(木) 予選1回目】

第1ライダー芹沢選手、第2ライダー出口選手、第3ライダー井筒選手、リザーブライダー寺本選手がそれぞれ20分間の予選1回目に挑んだ。

翌日に予選2回目を控えているため、1回目では無理をせずコース特性を理解する事を念頭に置き挑む。

井筒選手の予選ではなかなかタイムが上がってこないことにおかしいと感じた監督鶴田がクルーにかけより、確認。井筒選手の走行するマシンにトランスポンダー(計測機)を付け忘れるというミスに気付くことになる。井筒選手のアタックは計測されず1分43秒437という結果となってしまった。

予選1回目の結果は 芹沢選手1分40秒410(17番手)、出口選手1分40秒405(13番手)、寺本選手1分41秒976(9番手)という結果で、SynergyForce TRICKSTAR は1分41秒417となり総合22番手であった。

【20日(金) 予選2回目】

予選1回目と同様に各ライダー20分ずつの予選に挑んだ。

第1ライダーの芹沢選手は1分40秒467 18番手、第2ライダー出口選手は1分39秒874 11番手、第3ライダー井筒選手は1分40秒624 19番手、リザーブライダーの寺本選手は1分42秒105 12番手となった。

チームとしての予選結果は1分40秒302となり、決勝のスターティンググリッドは17番手となった。満足のいく予選順位ではないが、現状持ち得る力を全て出し切った結果であった。

予選後、鶴田監督から重大な発表があった。

ルマンではチーム揃って食事を摂る事を心掛け、食事の時間はチームのミーティングの場でもあった。その夕食後に鶴田監督から 腰を痛めている井筒選手に代わり、リザーブライダーの寺本選手を第3ライダーに起用するという発表であった。

我々にとって24時間耐久レースは未知の世界であり、不安要素を抱えた井筒選手よりもウィーク中を通して安定した走りをみせていた寺本選手に24時間を任せるという判断だった。

井筒選手本人からの申し出もあったものの鶴田監督にとっては苦渋の決断であった。

寺本選手は24時間耐久レースに5度出場し、4度完走しているベテランライダーである。

井筒選手は決勝中、アドバイザーとしてライダーのケアや作戦に関して等、監督と検討する事となった。

【決勝 21日(土)~22日(日)】

第1ステント(1時間目)

15時、本場ルマン式スタートにてスタートが切られる。

スタートライダーは出口選手に任された。

オープニングラップを15位にて通過し、その後も作戦通りのペース走行にて周回を重ねていった。

その後、作戦通りの周回数にてピットイン、初のピットワークが行われた。

メカニックにも多少の緊張があったようで、タイヤ交換に通常より少し時間が掛かってしまったが問題無く交換を終え、給油を開始した。その際、海外レース特有の問題が発覚した。

現地にて調達した給油ホースの径が小さく、給油時間が通常の1.5倍程掛かってしまった。

この給油時間に我々は最後まで苦しめられる事となった。

第2ステイント(2時間目)

芹沢選手が担当する第2ステイント。

芹沢選手もしっかりとペースをまもり安定した走りにて周回を重ね16番手にて作戦通りピットインをした。ピットワークも順調に追え、急遽井筒選手に代わり起用された第3ライダー寺本選手へと交代した。

第3ステイント(3時間目)

寺本選手が担当の第3ステイント。

先に走った2選手と同様、しっかりとペースを守り周回を重ね、16番手をキープしていた。

そして作戦通りピットインを行い、タイヤ交換、給油を終え出口選手へと交代した。

第4ステイント(4時間目)

出口選手へと交代し、このステイントでも作戦通りペースを守る走行を行っていた。

24時間耐久という長丁場のレースのため、エンジンオイルを多めにに入れていた我々であったが、

マフラーから吹いている白煙をオフィシャルがマシン異常と誤認し、

オレンジボールフラッグが振られ緊急ピットインを余儀なくされてしまい18番手まで順位を落としてしまう。

その後はトラブルも無くペースを守る走行を行い順調に走行を重ね、4時間を終えた時点で16位となった。

第5ステイント(5時間目)

芹沢選手担当の第5ステイント。

今まで同様、ペースを守る走行を順調に行い、少しずつ順位を上げて行く。

トラブルも無く作戦通りの走行を終えピットイン。5時間を終えた時点で15位を走行していた。

第6ステイント(6時間目)

寺本選手も今まで同様にペースを守る順調な走りにて順位を挽回していった。

6時間を終えた時点で12位まで順位を上げる事が出来たが、しかし思うようにペースが上がらない。

フランスは夜9時過ぎまで明るいため、この辺りから日が沈み始めライトオンボードが出された。

ライトオン後も周回を重ね、作戦通りのピットインを行う。この時わかったのだが、フロントタイヤの空気が抜けていて何度も転びそうになっていた。

寺本選手のトラブルはフロントタイヤを交換したことで解消された。

第7ステイント(7時間目)

出口選手担当の第7ステイント。

完全に日没を迎え、ここから長い夜間走行が始まった。

しかし、慣れないコースでの耐久レースにも関わらず

他チームにも引けを取らない安定した走行にて周回を重ねる。

12位をキープし、次の芹沢選手へとバトンを繋ぐ。

第8ステイント(8時間目)

芹沢選手が担当する第8ステイントでもペース守った走行を行い

8時間を終えた時点で順位をひとつ上げ11位となった。

第9ステイント(9時間目)

寺本選手担当の第9ステイント。

8時間を越え、我々にとっては未知の領域へと突入した。

さらに6位～17位までがほとんど差がない状態で周回しており、油断出来ない状態でのレースとなった。

ここからが正念場となっていく。

そのような状況でも出口選手は作戦通りのペース走行にて周回を重ね、9時間を終えた時点で12位であった。

第10ステイント(10時間目)

ライダー、メカニック共に徐々に疲れが出始めてきた第10ステイント。
出口選手が担当し、ここでも作戦通りのペース走行を着実にこなし
10時間を終えた時点で12位を走行。
しかしここで、スクリーンの汚れが目立つようになっており、
通常のピットインのタイミングで素早くスクリーンを拭くシュミレーションがピットでは行われていた。
作戦通りの周回を終え、ピットイン。
シュミレーション通りスクリーン清掃を行い、順調なピットワークにて次の芹沢選手へと繋ぐ。

第11ステイント(11時間目)

芹沢選手担当の第11ステイント。
この周回でも堅実なペース走行を行い、着実に周回を重ねて行く。
11時間を終えた時点で12位を走行していた。
作戦通りピットインを行い、ピットワークも順調に済み次の出口選手へと交代する。

第12ステイント(12時間目)

寺本選手担当の第12ステイント。
深夜2時を回り、睡魔もピークに達している状況の中、着実にペース走行を続け、
12時間を終えた時点で12位をキープしていた。
ただ、12位から14位までが同一周回という切迫した状況であり、油断は禁物であった。

第13ステイント(13時間目)

出口選手が担当する第13ステイント。
ここまで堅実にペース走行を重ねていたが、前を走るマシンに徐々に追いついており、更に上位を狙える状況となっていた。13時間を終えた時点で12位走行していたが、10位から12位までが同一周回であり後続もほとんど差がない状況であった。疲れが見え始めたメカニックたちも堅実なピットワークを行い大きなロスも無くライダー交代を行う事が出来た。

第14ステイント(14時間目)

芹沢選手担当の第14ステイント。依然、前後のマシンとはほとんど差のない状況でありながら、ミスをせずに順調に周回を重ね14時間を終えた時点で12位をキープしていた。
10位、11位のマシンとは1周差、12位の我々と13位のマシンとは同一周回であり、14位のマシンとも1周差しかない接戦となっていた。

第15ステイント(15時間目)

長い夜間走行も終盤に差し掛かった第15ステイントを寺本選手が担当。ここでもペース走行を守り上位を狙って行った。しかしここでタイムが上がりなくなった。
ペースが上がらない寺本選手にピットインのサインを出そうとした瞬間、寺本選手自らピットインして来た。
またフロントタイヤの空気が抜けていた。15周を終えた時点で次のライダーの準備が出来ていない為、そのまま寺本選手がガソリンを入れた後コースインしていった。
ここからさらに29周を走り切りトータル45周を走りきることになった。

第16ステイント(16時間目)

徐々に明るくなり始めた第16ステイントは出口選手が担当。
ペースを上げる作戦へと変更したが、作戦通りの走りを出し出口選手が行ってくれた。
16時間を終えた時点で11位を走行していた。
9位から12位までの接戦はまだまだ続いていた。

第17ステイント(17時間目)

日の出を迎え、明るくなった第17ステイント。
芹沢選手も作戦通りの走行を行ってくれたが、
上位を走るマシンも我々との差がない事を意識しペースを上げていたが
17時間を終えた時点で9位まで順位を上げる事に成功した。
しかし、10位とは同一周回であり、さらに後続も迫っていたため油断は出来ない状況が続いていた。
さらに、8位と1周差でありさらに上位を狙うため、ペースアップの作戦を続ける事にした。

第18ステイント(18時間目)

寺本選手担当の第18ステイント。
ここでも寺本選手が期待通りの走行を行い、9位をキープし周回を重ねる。
18時間を終えた時点でも依然10位とは同一周回であったが
前を行く8位のマシンとは3周差がついてしまった。
何としても9位以上にならない我々はペースを落とさず
堅実なピットワークにて周回を重ねていった。

第19ステイント(19時間目)

出口選手担当の第19ステイント。
依然激しい9位争いを行っていたが、ピットインのタイミングで19時間を終えた時点でひとつ順位を落とし
10位に後退してしまう。

第20ステイント(20時間目)

芹沢選手担当の第20ステイントでも激しい9位争いが続いていた。
20時間を消化した時点で依然9位とは同一周回であり、後続の11位とも1周差であり、緊迫した状況が
続いていた。

第21ステイント(21時間目)

寺本選手担当の第21ステイント。
深夜から続く激しい9位争いを行っていた我々であったが、
走行中にシートカウルのステーが割れるというトラブルが発生し緊急ピットインを余儀なくされる。
メカニックたちは緊急事態にも関わらず、迅速に応急処置を施しすぐにコース復帰をするも
このトラブルの影響で11位まで順位を落としてしまう。
その後は順調に周回を重ねるも、先を行くマシンも堅実に周回を重ねておりなかなか差が縮まらない状況で
あった。

第22ステイント(22時間目)

第22ステイントは出口選手が担当。
ペースアップの作戦に応える走りを出し出口選手が行い、22時間を終えた時点で9位まで順位を挽回する。
しかし、後続との差はほとんどなく22時間を走り700周を越えた時点でも依然激しい9位争い繰り広げていた。

第23ステイント(23時間目)

芹沢選手が担当する第23ステイント。
ピットワークのタイミングで順位が入れ替わるかもしれないと、ピットクルーも集中し作業を行いミスなく送り出した。
それに応えるよう芹沢選手が最後の気力を振り絞り力走する。

第24ステイント(24時間目)

寺本選手担当の第24ステイント。

寺本選手に交代した時点で22時間30分が経過しており、

チームの期待通りの走りにて9位に順位を上げる事が出来た。

この時点で8位のチームとも差がなく、順位を更に上げられる可能性があった。

しかしライダーの疲れもピークに達している状況を鑑みて

今まで通りのペースでの作戦とした。

チームは、このウィーク中、調子の良かった出口選手に最終ステイントを任せる事にし、

残り30分を残し、出口選手へとライダー交代を行った。

最終ステイント(フィニッシュ)

出口選手へと交代し、長かった24時間も残り30分となった。

9位走行していたが、10位とは同一周回であり、8位とは30秒の差だった。

上位を狙いに行きたいが、鶴田監督、井筒選手、チームで話し合いこの差は届きそうもないと判断しキープする走りに徹した。

遂に9月22日15時にチェッカーフラッグが振られた。

こうして、日本プライベートチーム ル・マン24H初参戦は無事ゴールを迎えた。

SynergyForce TRICKSTAR は798周、総合9位、クラス7位となった。

【ライダー 芹沢太麻樹】

ル・マン24時間耐久レースという歴史ある伝統レースに参加できたことを、非常に光栄に思っています。

純日本チームでの初参戦ということで、すべてが未知の世界というなか、完走、9位というリザルトを残せたのも、ライダーはもちろん、スタッフ全員が一丸となって取り組んだ結果、そして、多大な声援を送っていただいたファンのみなさまのおかげと、感謝しています。

個人的には、私自身も24時間耐久レースは初めてということで、また、今年3月に負った、完治していない左肩の怪我のことも含めて不安要素はたくさんありましたが、そこに至るまで、あらゆることを想定し全力で取り組むことによってそれを払拭し、この難関を越えることができました。

これもひとえに、応援してくださいました皆さまのおかげと、再度、御礼申し上げます。ありがとうございました。

初体験だった深夜の走行もさることながら、日の出に伴い、朝焼けに包まれた中での走行、そこに広がった光景は今でも忘れられません。

今後、もしチャンスがあれば、また挑戦したいと思います。

【ライダー 出口修】

先ずは、“Le Mans 24hours” 挑戦への夢を叶えて下さったSynergy Force様はじめ、スポンサー様、関係者の皆様、ファンの皆様、そしてTRICK STAR RACINGに心から感謝いたします。

初チャレンジのル・マンは驚きと発見の連続でした。24時間休む事無く走り続ける、気力と体力の限界を常に超えた戦い。コース上のライバルとの戦いと言うよりは、終始己との戦いでした。

それを支えてくれたのが、意識朦朧しながらも懸命に働くスタッフの姿、共にモチベーションを高め合った太麻樹さん、井筒さん、寺本選手の走りサポートでした。9位と言う結果には決して満足していません。ただ、現地で仲間と得た特別な達成感と感動は、何ものにも代えがたい貴重な経験となりました。

反省もしなければなりません。24時間戦う上での準備不足は否めず、ハード面でのハ

ンデが少なからず走る以前に有った事も事実です。我々、プロの集団としてやり残しや後悔が有ってはなりません。結果を真摯に受け止め、今回の経験を糧にそれぞれが成長し戦う力を付けた時、また世界のル・マンに挑戦したいです。

最後になりますが、今回の参戦にあたり、本当に多くの方々にも励ましと労いのメッセージを頂きました。その声一つ一つが我々の力になった事をお伝えすると共に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

【ライダー 井筒仁康】

SynergyForceTRICK★STAR RACINGから参戦が決まりフランスに乗りこみました。

火曜日のフリー走行では初めてのコースと言うこともあり、事前テストで芹沢選手と出口選手が仕上げたマシンでの乗り込みをしました。

木曜日の予選ではマシンの確認をしながら走行を終えました。

金曜日の予選では1分40秒6とタイムを出し、芹沢選手 出口選手と近いタイムを出しましたが、前戦で痛めた腰が24時間の長丁場で持つかどうか不安でした。

今回急遽サブライダーとして参加してくれた寺本選手はルマンも参戦したことが有り、24時間耐久は5回出場経験しているライダーでラップタイムも遜色ないタイムで走行を続けてくれていました。

自分自身24時間耐久を今の体調で走る事に不安を抱えており、途中で走れなくなった時、他のライダーに負担をかけてしまうことがチームのベスト選択だと思わなかったため、鶴田監督に相談し寺本選手との交代をお願いしました。

ライダーとしては参加を断念しましたが、みんなが4人で走るつもりで走ってくれると言ってくれ、ライダーサポートに徹しました。

土曜日、午後3時伝統のルマン式スタートで24時間耐久レースがスタートしました。

出口選手、芹沢選手、寺本選手と順調に走行を続け、色々マイナートラブルがありましたが24時間無転倒の9位でゴールすることが出来ました。

夜間の走行ではライダー メカニックとスタッフみんなが眠気と疲労感で疲れを見せていましたが、みんなが気持ちを一つにして頑張った結果が、オールジャパン初参戦で9位という結果を残せたのだと思います。

今回はライダーとして参加出来なかったですが、スプリントレースとは違った感動を与えて頂きました。24時間耐久レースの厳しさ難しさを感じましたし、チームみんなで戦える楽しさを感じる事が出来ました。来年走るチャンスがあれば、また挑戦したいと思います。スポンサー様や応援して下さいみなさまに感謝しております。全日本も後半戦に入って来ましたので、気を引き締めて頑張りたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

【ライダー寺本幸司】

この度SynergyForceTRICK☆STAR RACINGから2013年ルマン24時間耐久レースに参戦させて頂いた寺本幸司です。

自分はリザーブライダー(第4ライダー)としてチームに合流し、井筒選手、芹沢選手、出口選手、チームスタッフと共にフランスのルマン・ブガッティサーキットに入りましたが、唯一自分だけが過去にルマン24時間耐久レースを経験しているということでライダーとしてだけではなくアドバイザーとしての役割も兼ねてチームに貢献させて頂いていました。

今年のルマン24Hは火曜日から特別フリー走行があり僕を含める4人のライダーが精力的にサーキットを周回してセットアップを重ね耐久レース用にZX-10Rを仕上げ、ミーティングを重ね24時間耐久レースに向けて準備は進んでいきました。

実はカワサキZX-10Rを始めてライディングした僕は意外と苦労もなくすぐに順応できたのもZX-10Rの持つ素性とTRICK☆STAR RACINGのセットアップされたマシンのレベルの高さが伺えました。

木、金曜日とフリー走行→予選と一気に緊張感が高まってくる中チームは予選17位を獲得！！これは第1～3ライダーのタイムの平均で決定するために第4ライダーの自分のタイムは反映されません。なので予選でしたが中古タイヤでセットアップの確認、ロングランでの確認などを中心に行いながらのセッションとなりました。

しかし予選を終えた後鶴田チーム監督から「決勝レースは怪我の状態が良くない井筒選手の代役で走って欲しい」と言われ正直大きなプレッシャーの反面やっと思番が回ってきたと言う興奮する気持ちが入り混じった感覚になったことを覚えています。

迎えたスタート土曜日の午後3時、ルマン式スタートを出口選手がこなして芹沢選手にバトンを繋ぎそして自分へと・・・このまま永遠にこのサイクルが続くのではないかと思うくらい果てしなく長いレースでした。

決勝中は2度のフロントタイヤのスローパンク、メータートラブル、シートが外れるトラブル・・・全て自分のステイットの時に起こりましたね。途中何度も転倒しそうになりながらピットにマシンを運ぶ作業は決して容易ではなく辛く、心が何度も折れそうになりましたがピットに帰還するたびに井筒選手が励ましの言葉をかけてくれて、ピットスタッフも作業で応えてくれたお陰で24時間後のゴールまでバトンを繋ぐことができました。

結果総合9位！！この結果は発参戦さらに全て日本人チームとして参戦した結果としては驚異的だと思います。

60台中20数台がリタイヤする過酷なレース。

レースの約半分が夜。

ライダーだけではなく本当にチームワークが重要なレースです。

今回は思いがけなく井筒選手の代役と言う非常に重大な任務を任せましたがそれをこなすことができ今はホッとしています。

自分は初めてTRICK☆STAR RACINGの一員として加わったのにチームは本当に気持ちよく迎え入れてくれました。

過去5回24時間耐久レースに参戦して今回で6回目！！

そして過去最高の結果を残せたことに感謝とプライドを持つことができました。

さらに7回目、8回目そして表彰台を目指すのをSynergyForce TRICK☆STAR RACINGと達成できれば最高に嬉しいです。

この度チャンスを与えてくれた鶴田監督、スポンサーの方々ありがとうございました。

【監督 鶴田竜二】

念願のル・マン24Hに参戦できた事に素直に喜ぶと同時に、我々にチャンスを与えて頂いたSynergy Force様を始め各スポンサー様方に感謝しております。

知らない土地、知らないコースで我々に手厚いサポートを頂いたDUNLOP様には頭が下がります。

遠く離れた地、日本から温かい声援を送って下さったファンの皆さんの御陰で勇気を持って走り切ることが出来ました。本当にありがとうございます。

海外ライダーのレベルも高く、初参戦ではなかなか表彰台は難しく思いました。

我々もそれなりに準備をしていたのですが、現地でしか調達できない物が盲点でした。

例えばガソリン給油用ホース、現地の人に用意してもらったのですが、これが思ったよりも細く、給油時間が通常の1.5倍掛かってしまいました。

また日本ではOKのはずの窒素ボンベが、ル・マンのレギュレーションでは禁止されており、圧縮空気を使用しなければならなかったのです。こちらも用意してもらった物の容量が足らず、出力が安定せず苦勞しました。

いずれにしろ、事前に何度も確認していたのですが これらの物がレースウィークにならないと手に入らないという状況なども、海外レースの難しいところでした。

ピットワークのシステムがせめて日本で使用しているレベルなら計算上5位以内には着けたと思います。

初めて挑むレースでライダーもどんなペースで走ればいいのか、皆目見当がつかない中、序盤はペースをしっかりと守り、中盤以降の夜が明けてからは それぞれのライダーがブッシュしていきました。

今回で24時間走りきってペースが掴めたと思うので、次回からはトップグループに混ざれると思います。

終わってみれば、ライダーも転倒がなく、エンジントラブルもなく走りきれた事はチームにとって大きな財産になったと思います。

この結果が必ず次回に生きてくることでしょう。

今回私は24時間一睡もせず、集中を切らすことなく戦い切れました。

レース展開はずっと追いつけるレースだったので気が抜けず、むしろ24時間、ずっと楽しんでいたようにさえ思います。

今回のレースでは9位という満足できる結果ではありませんが、次回に向けて「やれる！」という自信は持てました。これからもチャレンジは続けて参ります。